

氏名	李 惠平
ヨミガナ	リ ケイヘイ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第381号
学位授与年月日	令和6年3月25日
学位論文等題目	（論文） Toward A “Situated” Music Historiography: Chou Wen-chung, José Maceda, and Their Representations of Korean Music

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	福中 冬子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	植村 幸生
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	沼口 隆
（副査）	京都市立芸術大学	名誉教授		柿沼 敏江
（副査）	桐朋学園大学	教授		沼野 雄司

（論文内容の要旨）

「状況化された」音楽史記述の可能性：グローバル音楽史と間文化性の文脈における周文中とホセ・マセダによる韓国音楽の表象

本研究は、近年の音楽学で注目を集めている「グローバル音楽史global history of music」および「音楽の間文化性musical interculturality」の二つの学術的潮流に視座を据えつつ、音楽史記述、とりわけアジアの現代音楽研究に従事する際に、「歴史」と「ポジショナリティ」の重要性を唱えるものである。具体的な事例研究としては、いずれも戦後アジア第一世代作曲家に属す、中国系アメリカ人の周文中(Chou Wen-chung, 1923-2019)とフィリピンのホセ・マセダ(José Maceda)の作品における韓国音楽の表象を取り扱う。以上の学術的潮流を踏まえて、朝鮮にルーツを持たざる両氏による韓国伝統音楽の解釈に注目することで、現代音楽史における彼らの立ち位置を西洋・非西洋という二項対立に依拠しない立体的視点で把握することができ、そしてそれは、アジアの音楽学者が複雑な文化的背景を含めた音楽史記述に取り組む際の、有益な示唆となるであろう。

本研究の方法論的基盤に関しては、主に陳光興「方法としてのアジアAsia as method」(2006)、D. ハラウェイ「状況化された知識situated knowledges」(1988)、および「意味の網としての文化culture as web of significance」という視座に由来した、C. ギャーツ「厚い記述thick description」(1973)に依拠しており、特に「厚い記述」に関する音楽研究への援用についてはG. トムリンソン(1986; 2001)を参照する。これらの理論的枠組みに従い、本研究は、(1) 知識生産の過程における参照枠の転換、(2) 先行研究との対話におけるポジショナリティの相対化、(3) 解釈・意味付けの過程における多角的な記述手法の採用の三つの側面を重視し考察を加えていく。

序章を除き、本論文は6章から構成されている。第1章では、「グローバル音楽史」という近年の学術的潮流のここ10年の軌跡を振り返りながら、その「西洋発」の性格を再確認した。D. ハラウェイの「状況化された知識」およびJ. アデルマンの「場所の影響力power of place」から着想を得た本章は、上述の潮流で周縁化されつつある東と東南アジアの研究者に対し、「状況化された音楽史記述situated music historiography」という、音楽史家自身のポジショナリティや知的欲求に真正面から向き合う音楽史記述のあり方を提唱した。

第2章は、本論文の基本的視点である「歴史」と「ポジショナリティ」に基づき、アジアの現代音楽研究における「音楽の間文化性」の学術的系譜を詳細に検討していく。本章から導き出される主な知見は、以下の4点に集約される。第一に、音楽学の学科史との連関を保ち、さらにオリエンタリズム的な言説や実践の

復権への警鐘を鳴らすために、むしろ異国情緒やオリエンタリズムといった概念を一時的に否定すべきではない。第二に、グローバルな視点で東と東南アジアの現代音楽を相対的に捉えるべく、アフリカの芸術音楽をはじめとする多様な参照軸への転換や探究が不可欠である。第三に、音楽的間文化性の学術研究は、2000年初頭に作品の分類法が重要視されていたのに対し、近年では個々のアーティストの行為主体性に関心が集まるようになった。最後に、北米の音楽理論界において音楽的間文化性が付与されている社会的・政治的な意義に鑑みつつ、アジアの文脈においても、研究対象及び研究者自身の主体性に対する批判的な視点が必要である。

第3章は、理論に焦点を当てた第1章と第2章と、事例研究が中心である第4章以降との橋渡しをする章であり、従来の音楽史研究でしばしば見過ごされてきた「アジア作曲家連盟 (ACL)」に焦点を当てるものである。これは、ACLとは緊密な関係にある周とマセダを考察するための土台を築くと同時に、ACLへの参加が1970年代の日本国内で引き起こされた論争を読み解くことによって、音楽史研究における政治的イデオロギーという視点の有用性を唱えるものである。

第4章では、スイス・バーゼルのパウル・ザッハー財団所蔵の一次資料および韓国人音楽家とのインタビューを基に、周文中の『蒼松Eternal Pine』(2008)の作曲過程を緻密に解明した。この作業は、既往研究で取り上げられてこなかった周の作曲過程に光を当てただけでなく、周と韓国人音楽家との意見の齟齬を考察することで、これまで不問にされてきた周の「文化的権威」に、音楽史の中で批判的な考察を加える端緒を開いた。

ミクロな視点に依拠する前章と異なり、第5章はホセ・マセダの約50年に及ぶ「インターアジア」的な国際活動、音楽研究、および作曲技法を総合的に検討し、「構造主義人類学」と「ミュージック・コンクレート」がマセダに与えた影響を明らかにする上で、彼の作曲手法を「聴覚経験の再組織化と美学化」と名付けた。韓国宮廷音楽の《寿齊天》に対するマセダの分析およびそこから着想を得た同名の作品《Sujeichon》(2002)を並置させることで、この作品はどのように彼生涯のインターアジア的实践や知的関与を体現しているのかに解釈を加えた。

第6章では、前述した二つの事例を比較しながら、既存の音楽史において彼らの位置付けを改めて咀嚼すると共に、「創造的音楽学creative (ethno)musicology」および「創造的(誤)理解 creative (mis)understanding」の概念を軸にしたアジア現代音楽史の新たな可能性を示唆して本論文の締めくくりとする。

Abstract

Toward A “Situated” Music Historiography: Chou Wen-chung, José Maceda, and Their Representations of Korean Music

This dissertation foregrounds the significance of “history” and “positionality” in music studies, with a specific focus on contemporary Asian music. Within the context of burgeoning academic trends in the “global history of music” and “musical interculturality,” this study examines the representations of Korean music by Chinese American composer Chou Wen-chung (1923–2019) and Filipino composer and ethnomusicologist José Maceda (1917–2004). It argues that investigating the representation of Korean music by non-Korean Asian composers unveils novel insights for future research on contemporary music and music historiography in East and Southeast Asia, an approach I delineate as “situated music historiography.”

The dissertation’s methodology is underpinned by three critical thinkers: Kuan-Hsing Chen’s “Asia as Method” (2006), Donna Haraway’s “Situated Knowledge” (1988), and Clifford Geertz’s “Thick Description” (1973), which views culture as a “web of significance” and is further enriched by Gary Tomlinson’s application of Geertz’s insights into music studies (1984; 2001). Through synthesizing these perspectives, the dissertation emphasizes (1) the potential to shift reference frameworks in knowledge production; (2) the importance of in-depth dialogues with prior studies by relativizing positionalities;

and (3) the exploration and adoption of diverse descriptive methods in the interpretive process.

The dissertation comprises an introduction and six chapters. Chapter 1 examines the trajectory of the global history of music over the past decade, highlighting its West-centric orientation and the marginalization of East and Southeast Asia. Drawing on Jeremy Adelman's concept of the "power of place" and Donna Haraway's "situated knowledge," it calls for music scholars in Asia to leverage their unique positionalities and intellectual desires when crafting music histories. Chapter 2 delves into the academic lineage of "musical interculturality" in contemporary Asian music, scrutinizing it through the lenses of "history" and "positionality" and seeking insights from related fields, including debates on musical exoticism, the genealogy of African art music, the complementary relationships between historical and analytical approaches, and the social relevance of musical interculturality within the North American circle of music theory. This comprehensive review advocates for a critical assessment of the agency of both research subjects and researchers within the Asian milieu.

Chapter 3 connects the theoretical discussions in the first two chapters with the case studies that follow. This chapter lays the foundation for analyzing subsequent case studies of Chou and Maceda by focusing on the Asian Composers' League (ACL). It also emphasizes the efficacy of employing political ideology as a strategy for critical inquiries into postwar Asian music history.

Chapter 4 examines Chou's compositional process for *Eternal Pine I* (2008), using primary sources housed at the Paul Sacher Stiftung, Basel, Switzerland. It highlights Chou's authorial agency and negotiations with Korean musicians, offering a nuanced perspective on his frequently under-explored "cultural authority." Conversely, Chapter 5 offers an extensive analysis of Maceda's nearly five-decade-long inter-Asian endeavors, illuminating the influences he received from structural anthropology and *musique concrète*. By coining Maceda's compositional approach as the "reorganization and aestheticization of aural experiences," this chapter concludes with a detailed interpretation of his *Sujeichon* (2002) as the culmination of his long-term intellectual pursuits.

Chapter 6 concludes the dissertation by comparing the discussed cases with preliminary attempts to resituate both composers within music histories, suggesting that notions such as "creative musicology" and "creative (mis)understanding" could provide productive strategies for framing contemporary music history in Asia.

(総合審査結果の要旨)

本論文は、ここ20年ほど、とりわけドイツ語圏の音楽研究者を中心に取組まれてきた「グローバル音楽史」および同枠組みを構築している諸理論(≒イデオロギー)を、その原動機や研究史上の変遷を背景に批判的に考察したうえで、これからの研究上の展望を3つのケース・スタディーを通じて提示した、非常に野心的な論文である。英語での執筆となったが、米国留学が大前提である台湾を出身とする若手研究者が、「敢えて」同じ東アジア(日本)にて研究を行い、大きな政治・社会的変遷を経た韓国とフィリピン出身の作曲家について記述する、という行為そのものが、これまでの「グローバル音楽史」を補完すべき音楽研究の一事例として本研究を成立させている。「グローバル音楽史」概念の批判的検証に際し、申請者が大きく依拠しているのが、「situated knowledge」(Donna Haraway)と「thick description」(Clifford Geertz)である。とりわけ前者は、これまでのグローバル音楽史においては、テクニカルかつ音響上の分析に終始しがちな一方で、創作者、受容者、そしてなによりも歴史記述者のpositionality(=どのような文化に位置し、どのような政治・美学的イデオロギーに依拠し、何を語る対象と据えているのか)が大きくバイパスされてきた事実を踏まえるならば、本研究の中核を支える概念と言ってもよく、それについて申請者は、「歴史」(創作者の文化史、作品の成立史および受容史、および成立を支えた歴史的コンテキスト)の強調を通じて非常に説得力をもって論じている。

本論文は、本研究の主たる検証対象である「グローバル音楽史」の再考および本研究の理論的前提の中核にあたる諸概念（上述のsituated knowledge、thick description、positionalityなど）の詳細な記述から構成される第1・2章と、それら章を通じて提示される、「グローバル音楽史」のあるべき姿を、事例研究を通じて考察する第3・4・5章、およびこれからの展望を詳述する第6章からなる。このうち、とりわけ博士課程における申請者の研究成果が説得力をもって提示された冒頭2章は、「グローバル音楽史」の諸研究者による、一見相対主義的な世界音楽文化の記述が、技法面、音響面の詳細な分析への偏りゆえに、「歴史」の欠如した、極めて平面的な「世界音楽」の記述に終始しがちであることが、多くの関連テキストの批判的な検証を通じて非常に説得力をもって論じられ、この先、多くの研究者から参照されるべき基盤研究としての価値を持つものとなっている。他方、第3章以降については、第2章までは記述に立体感を与えていた申請者自身の文化的立ち位置から来る解釈や、作曲家（事例研究の対象であるChou Wen-chungとJosé Maceda）以外のエージェント達（彼らが想定したオーディエンスや彼らの作品を評するであろう記述者たち）への視点が十分ではないことが若干悔やまれる。

審査会においては、アジア作曲家連盟を事例研究として扱った第3章の役割が不透明であること、冒頭2章で提示された中心的概念が事例研究の章で十分に回収されていないことなどに関する指摘等がなされたものの、本研究が非常に高い学術上の意義を持ち、疑念なく博士の学位にふさわしい成果を挙げている旨が、全審査員により確認された。